

# システム科学コンサルタンツ



スーダンの病院建設調査で



設計部次長（一級建築士）

**西山 謙太郎さん**  
(45歳)

Nishiyama Kentaro

## 南スーダンで職業訓練に貢献

**大** 学で建築を専攻していた当時は、開発途上国で仕事を

するなど想像もしていませんでした。しかし、研究室の教授にシステム科学コンサルタンツを「君に向いているかも」と紹介されて、興味本位で採用試験を受けたことが、この道に進むきっかけとなりました。

入社後間もなく派遣されたのは、中米グアテマラ。小学校の校舎を建設する案件で、調査のために地方の村々を訪れると、人々がまるで「日本人代表」のように私を見ていることが当時は新鮮でした。

その後もエルサルバドルやネパール、アフガニスタン、カンボジアなどでコンサルタンツとしての経験を積みました。駆け出し時代は思うように設計の仕事がせしてもらえませんでした。34歳でボリビアの保健施設案件の調査から参加し、14カ月の間、ひとり現地で施工監理を任された頃から、コンサルタンツの仕事に手応えを感じるようになりました。

その後、37歳から足掛け5年間南スーダンで、自動車修理や建築などの技能者を育成する職業訓練センターの能力向上を目指した技術協力案件の一員として、主に機材や施設の整備を担当しました。

首都ジュバでも20年以上続いた内戦の影響で現地では、建設作業員のレベルも低く、図面通りに仕事をしないなど、一筋縄ではいかならない難しい局面が続きました。また、センターの収入創出活動として自動車整備事業を導入したところ、指導員や作業員たちがセンター側に高額な利益分配を求めて、ナタやハンマーを持って騒ぎ立て、私が入って沈黙化を図らざるを得ない事態が発生しました。想定外の事態が散発する現場でいかに困難に対応するか自身の技量を試され、鍛えられた期間でした。

こうした苦労の反面、自分が設計した建物や施設が現地の人々の生活に役立っているのを目にした時、この仕事に大きなやりがいを感じます。

## Check

### ソフト主導の開拓者 現場主義を貫く

システム科学コンサルタンツは1975年の設立以来40年以上にわたって、教育・職業訓練、保健・医療、農業・水産などの分野で実績を積んできた老舗コンサルティング企業。インフラ整備が政府開発援助（ODA）事業の主流だった創業当時から「ソフト主導による開発プロジェクトの推進」を掲げて、日本の開発協力をけん引してきた。

もちろん、国際開発の現場ではソフト面の支援だけでなく、ハード面の支援も同時に求められている。そのため、同社は長年の事業で培ってきた社会開発のノウハウをベースとしつつも、設計や施工監理といったエンジニアリングサービスを含めたトータルな開発コンサルティング業務を展開しており、これまでに100カ国以上のプロジェクトを手掛けてきた。

そんな同社のモットーは「現場主義」であり、「質が信頼を生み、信頼が質を高める」という基本

姿勢を貫いている。そのため、現地の人々や歴史・文化を理解する資質と多様なバックグラウンドを持つ人材を求めており、即戦力となる経験者だけでなく、意欲ある若手人材を積極的に採用している。経験の浅い新入社員も積極的に現場に投入し、現場主義で育成していく方針だ。



## company data

システム科学コンサルタンツ株式会社  
System Science Consultants Inc.  
〒102-0083 東京都千代田区麹町4-2 麹町4丁目共同ビル9F  
設立：1975年6月 資本金：9,900万円  
従業員数：60人  
代表者：代表取締役社長 岡本哲朗  
事業分野：(ソフト分野)保健・医療、教育・職業訓練、平和構築、官民連携(BOPビジネス、中小企業海外展開支援)など (ハード分野)建築設計、機材調達

## recruitment

新卒採用：なし 中途採用：あり  
募集職種：開発コンサルタント  
募集人数：若干名  
TEL：03-3265-8311(代)  
E-mail：ssc@ssc-tokyo.co.jp  
URL：https://www.ssc-tokyo.co.jp/

## Career Path

Age

25

日本大学理工学部を卒業後、システム科学コンサルタンツに入社。約10年間、中南米や東南アジアの学校建設プロジェクトなどに設計補助や施設計画担当として従事

34

ボリビアで保健施設の調査・施工監理に従事

37

約5年間南スーダン職業訓練センターの施設整備をはじめ複数のプロジェクトに従事

44

スーダン母子保健病院建設プロジェクトで業務主任として従事

今はスーダンの母子保健病院の建設に業務主任として携わっています。2018年に病院が完成した後は、当社で別に受注した技術協力プロジェクトでの活動が当病

院で行われる予定であり、ハードとソフトの連携が実現します。私が設計した施設がどのように活用されていくのか、今からとても楽しみです。